

縦の木・文学碑

昭和45年に「縦の木は残った」の放映されたときのシンボルの木です。これはそのときに除幕された「縦ノ木は残った」の最後のページです、書いたのは「清水きん」と言ってお山本周五郎の奥さんです。山本周五郎の本名は清水三十六といひまして、奥様はこの近くの亘理町のご出身です。

この縦の木は自生の木で、この周辺にも何本か見られます。当時はこの山に10万人は登ったようで、新聞は山が沈むようだったと書いています。

この小説の描かれた「寛文事件」とは次のような伊達家の騒動です。

伊達家は政宗、忠宗、綱宗と続きますが、この綱宗が酒色にふけり、家士のいさめも聞き入れなかったとして21歳で逼塞（ひっそく）を幕府から命じられ、当時2歳の亀千代が家督を継ぐということがおきました。このとき幕府は領主が余りに若いので、伊達兵部宗勝と田村右京宗良の2名が後見として藩政を見るように命じました。

後見の伊達兵部は奉行職にあった原田甲斐宗輔と権力の私物化をはかり、それに反対する伊達一門との対立が深まりました。そんな折に伊達兵部と伊達安芸宗重との領地争いがおき、伊達安芸が幕府に上訴しました。

綱宗の蟄居にもいろいろな説があり、酒色にふけたという根拠はありません。また、伊達兵部と原田甲斐が権力の私物化を計ったと言われてはいますがその根拠もなく、逆に家臣団が自分たちに都合の良い領主を求めた結果と言うこともできます。

寛文11年(1671)3月27日に裁判を行うために大老の酒井忠清邸に関係者が招集され、吟味中に原田甲斐が伊達安芸を刺殺し柴田外記と乱闘になり、酒井家の家臣に殺害され、外記もその傷が元でその日のうちに死亡するという事件がおきました。

関係者が死亡した後の事後処理では原田甲斐や兵部派が処罰され、伊達家には累が及ばないという結果になりました。

原田甲斐は増上寺の良源院で葬られましたが、罪人として墓碑は建てられませんでした。

甲斐の子、原田帯刀（たてわき）ら4人はいずれも切腹、帯刀の子2名も斬首になりました。母の慶月院は亘理の伊達家に預けられ、食を絶って亡っています。

伊達兵部は土佐に流され、その地で没しています。

この寛文事件は歌舞伎の「伽羅千代萩」では悪人として、「縦ノ木は残った」では身を挺して伊達家を守った忠臣として原田甲斐が描かれています。

この事件は戦乱の世が治まり、太平の時代が始まる過渡期の事件として、単なる家督相続の争いではないという見方もあります。